令和４年度　埼玉県特別活動研究会　研究主題

多様な他者と協働する力を育む特別活動

１　主題設定の理由

「子供たちの学びを止めない」これは、現在の日本の学校教育に課せられた大きな使命である。GIGA スクール構想により一人一台端末が整備され、ICT を活用することで、オンライン学習等による「学びの保障」と、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善といった「学びの充実」との両面から成果を上げている。そのことは、「令和の日本型学校教育」が掲げる個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けて着実に歩みを進めていると言える。

一方で、令和３年度の全国学力・学習状況調査では、「学校に行くのは楽しいと思うか」の質問に「当てはまる」と回答した児童生徒が前回調査よりも減少し、小学校では調査を開始して以降初めて５割を切った。また、小中学校の不登校の児童生徒は、前年よりも１万５千人増加し、過去最多となった。これらの結果には、友達との触れ合いや関わり合いが制限されたり、学校行事等が削減されたりしたことなど「コロナ禍」が一因であると考えられる。しかし、我々教師は、「コロナ禍」を言い訳に子供たちの学びを止めるわけにはいかない。学校は子供たちにとっての社会である。その社会である学校は、教師の指導・支援によってすべての子供たちにとって、楽しく、居心地のよい魅力ある場所でなくてはならないのである。

今、社会では、自分とは異なる考え方や価値観を受け入れることができず、他者と距離をおこうとする風潮も見られる。また、インターネットや SNS 等の普及は生活を便利にしてくれている一方で、匿名で対面せずに画面上で簡単にやり取りできてしまうことから、相手を安易に批判してしまうという現状もある。しかし、異なる考え方や価値観との出会いこそ、自分の考えを広げるきっかけとなるはずである。このような現状を受け、学校教育においても、多様な他者や価値観を尊重することが求められている。今こそ、同じ空間で時間を共にすることを通して、互いの感性や考え方等に触れ、刺激し合うといった「リアルな人間関係」の形成が必要である。さらに、違いを受け入れ、異なる意見を認め合い、生かし合って活動することは、よりよい人間関係を築き、他者と協働しながら未来を拓く力の育成にもつながる。この点からも、自分も他者も大切にし、協働する経験を積み重ねることは重要であると考える。

本会では昨年度、「よさや可能性を発揮し合い、確かな資質・能力を育む特別活動」を研究主題に掲げ、一人一人のよさや可能性を発揮し合うための手立てや、確かな資質・能力を育むための指導と評価の方法について研究を深めた。その成果として、①子供が自分のよさや可能性に気付き、発揮し合うための手立てが明確になったこと、②教師が子供一人一人のよさや可能性を見つける視点を明確にすることで、指導と評価の方法についての工夫・改善できたこと、③一人一人がよさや可能性を発揮し合えるようにすることで、よりよい人間関係の形成につながることの３点が明らかになった。その一方、課題として、①確かな資質・能力について、より具体的にし、実践を積み重ねること、②よさや可能性を発揮し合うためには、多様な他者と協働する力を育むことが重要であることの２点が確認された。

以上のことから、自分も他者も価値のある存在として尊重し、多様な他者と協働することができる子供たちを育成していくことが重要であると考え、研究主題を「多様な他者と協働する力を育む特別活動」と設定した。

２　研究の目標

○　多様な他者と協働する力を育むための指導と評価の方法について明らかにする。

「多様な他者と協働する力」とは、「協働するための基盤となる力」を含め、以下のように考えられるが、どのような力が必要なのかについて、さらに研究を進めていく。

・人によって考え方や価値観に違いがあることを認識できる
・自分の考えをもち、相手に伝えることができる
・他者の考えを認めたり、他者の立場に立って物事を考えたりすることができる
・目標を理解し、達成するために他者と協力することができる
・よさや可能性を発揮し合い、高め合うことができる

３　研究の内容

研究を進めるにあたり、次に示す２つの内容を中心に、専門委員会ごとに研究の視点を設け、それぞれの実践において、身に付けさせたい資質・能力を明確にし、その育成のための手立てや方法について研究を深めていく。

⑴　多様な他者と協働する力を育むための指導計画

子供たちの今の実態と将来の姿を見据え、年間や学期、あるいは、各実践の中で、発達の段階に応じた活動を展開していくための指針となる指導計画について研究していく。以下は、そのポイントである。

①　「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の視点を踏まえた指導計画を作成する。
②　多様な他者と協働する力について明確にした指導計画を作成する。
③　発達の段階を考慮し、学年間の系統性やつながりを意識した指導計画を作成する。

⑵　多様な他者と協働する力を育むための指導と評価の方法

指導については、集団活動のよさを生かしながらも、事前・本時・事後それぞれの活動における実践上の留意点にも目を向けていく。また、評価については、一人一人の変容を見取るために、自己評価に留まらず、よりよい相互評価の方法にも重点をおいて研究していく。以下は、そのポイントである。

①　「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の視点を踏まえた指導と評価の在り方を考える。
②　一人一人が集団の中で多様な他者と協働することができる具体的な手立てを工夫する。
③　学年間や活動間のつながりを踏まえた指導と評価の方法を工夫する。

なお、⑴⑵において、ICT やキャリア・パスポートの効果的な活用についても研究を深めたい。その際、多様な他者と協働する力を育むために有効に活用できる方法について、ねらいを明確にした上で、ねらいに迫るために活用するという視点を大切にする。

今、学校の魅力が問われている。「子供たちの学びを止めない」この言葉の意味を我々教師は改めて重く受け止め、今一度真剣に考えなければならない。子供たちは、学校を含めた社会の中で、様々な人と関わりながら学び、その学びを通じて、自分の存在が認められることや、自分の活動によって何かを変えたり、社会をよりよくしたりできることを実感する。学校の魅力とは、「関わる楽しさ」や「学ぶ楽しさ」を実感し、人として成長できることではないだろうか。その成長した姿が持続可能な社会の創り手となる。「なすことによって学ぶ」を方法原理としている特別活動こそが、止めてはならない学びなのである。特別活動の理念を共有し、基礎基本を大切にしながら実践を積み重ねるとともに、コロナ禍に関わらず子供たちに確かな資質・能力を育成するための指導を持続可能にしていくことが求められている。それはまぎれもなく今である。